

## オテル・ドゥ・クリヨンで大七ウィーク開催

コロナも下火になった春から、そろそろ海外出張の再開を念じていましたが、この 10 月、思った以上に充実したパリ出張の機会に恵まれました。しかし、3 年振りの欧州出張には様々な変化も。空港を飛び立ったパリ行き直行便の飛行機が、西ではなく一路北東のアラスカへ向かったのには面食らいました。ウクライナ情勢の影響で、飛行機は大きくロシアを迂回して、カナダ北部からグリーンランドを横切り、イギリスを縦断して真北からパリへ。以前よりも 2 時間余り長い旅路で到着したパリは、この時期、ファッション・ウィークの真っ最中であり、ラグビーワールドカップの開催中でもあり、街中が華やかな賑わいに包まれていました。加えて来年にパリ・オリンピックを控えて至るところで道路の改修工事があり、いつも交通は渋滞気味。この喧騒もフランスらしさの一つかな？



クリヨンの大七ウィーク時の食事テーブル

さて、華やかなパリの中でも飛びきりの最高級ホテル、オテル・ドゥ・クリヨンでの 15 日間の大七ウィーク開催のために私はパリを訪れたのでした。5 つ星ホテルのうち格上はパラスホテルの称号を有しますが、その中でもクリヨンは、正しく宮殿そのものです。ルイ 15 世によって作られ、マリー・アントワネットもそこに住んでいました。かつてマリー・アントワネットが立ったバルコニーには、ご本人がいたずらに彫った M の字が残されています。

そんなクリヨンが、初めて日本酒にフォーカスしたプロモーションを行うのです。期間中は、メインダイニングのフレンチレストランはもとより、ラウンジでもバーでも大七の日本酒、梅酒や特製カクテルが用意され、そしてお泊まりになればお部屋では大七の小瓶がお迎えするという次第。私にはメインイベントの特別ディナーで、大七蔵元としてお客様にお話をする役割もありました。

実は、現在の駐フランス日本大使の下川真樹太さんは大学時代のクラスメイトなので、この折角の機会、もうひとりのクラスメイトと共に、下川大使と大七ウィーク開催中のクリヨンで食事をすることにしました。日本大使公邸は、高級ショッピング街のフォーブール・サン＝トノレ通りにあり、このような一等地にあることは日本人として誇らしく感じます。近くにはフランス大統領の住むエリゼ宮や米国大使館もあり、要所にマシンガンを持った警備の姿も。日本大使公邸に入ると、外とは打って変わって閑静な広い中庭と木立が広がり、下川大使の歓待でフランス人執事からアペロとしてシャンパンのサービスを受けました。それから、いざ、皆でぶらぶら歩いてクリヨンへ。何と、ものの 3 分でクリヨンの裏口(?)に着くのです。何とも豪華なご近所さんです。ロビーで、元 NHK 福島支局長で現在はパリ日本文化会館館長をされている、旧知の鈴木仁さんが我々に合流しました。

クリヨンに着くと、すぐにソムリエ長で、昨年、フランス最優秀ソムリエとなったグザヴィエ・チュイザさんが現れ、我々のためにクリヨンの歴史に触れるミニツアーをしてくださいました。それから食前酒を楽しみにバーへ。バーの名前は奇しくも「レ・ザンバサドール (大使)」といいます。ここで大七の生酏純米吟醸「真桜」を使ったカクテルを一杯。気持ちよく話が弾んだころ、チュイザさんがやって来て、我々のための食事会場、地下の特別室



特別室ラ・カーヴで、左席手前私、奥は大学時代友人と息子さん、カンパネラ総料理長、右席手前 友人の下川駐仏大使、奥は、鈴木仁パリ日本文化会館館長、チュイザソムリエ長



クリヨン夜景

「ラ・カーヴ」へご案内してくれました。それ自体が芸術作品である見事な天井があるこの部屋は、普段は使われません。ここで「箕輪門」や「純米生酏クラシック」、それにポートワインに舌鼓を打ち、翌日から本格的に始まるイベントを前に、しっかり英気を養いました。翌日の、世界各国からのお客様との特別ディナーもエピソードに満ちていましたが、その話はまたの機会にしましょう。もちろんユニクロのパリ店で、箕輪門Tシャツも購入。来年はパリの世界一有名な料理学校、コルドンブルーで講演いたします。

太田英晴（理事長・大七酒造株式会社）

### フランス料理を楽しむ会 2023 年度今後 2 回と新年度前期4回の講座日程のご案内

コース	月曜日コース	水曜日コース
日程	2/5、3/4、5/13、6/10、7/8、9/9	2/7、3/6、5/15、6/12、7/10、9/11
講師	料理担当 渡邊 昭徳（アルソニ オーナーシェフ） 菓子担当 相良 栄二（大玉ベース パティシエ）	菅野 喜代治（元カナル オーナーシェフ）
教室	MAX ふくしま4F A・O・Z（アオウゼ） 午前10時～	

1回だけのお試し参加も出来ます。  
石堂 090-7063-3453

### 私のフランス語日記 Mon journal en français

#### Le vin du Tomioka

L'automne est synonyme de Beaujolais Nouveau pour les amateurs de vin. Cette fois-ci, je vais parler du "vin de Tomioka" de la ville de Tomioka, une région touchée par le grand tremblement de terre de l'est du Japon.



ミスインターナショナルのメンバー

À la mi-octobre de cette année, j'ai visité le vignoble de Tomioka avec les 30 candidates de "Miss International 2023". Les filles ont visité Tomioka dans le cadre de leur tournée pré-concours au Japon, et j'ai participé en tant qu'interprète.

Tomioka-machi comptait 16,000 habitants avant le tremblement de terre, mais suite au tremblement de terre, au tsunami et à la catastrophe nucléaire du 11 mars 2011. Le nombre de personnes vivant dans la ville est maintenant d'environ 2,200. La ville est un endroit merveilleux, qui se transforme grâce à l'énergie de ses habitants pour reconstruire. L'endroit, Yonomori, est une attraction pour les cerisiers en fleurs, avec un chemin de 2.2 km en forme de tunnel, bordé de 1,500 cerisiers. Cette année, le festival des cerisiers en fleur battait son plein. En 2019, le jardin d'enfants, qui a commencé avec cinq ou six élèves, et en compte aujourd'hui 70. Le nombre de générations futures

#### 「とみおかワイン」のお話

秋といえば、ワイン好きにとってはボージョレ・ヌーボー。それで、今回は東日本大震災の被災地である富岡町での「とみおかワイン」について話します。

今年 10 月中旬、私はミスインターナショナル 2023 世界大会出場者 30 名のミスたちと、とみおかワインのぶどう園を訪れました。ミスたちは、大会を前にして日本各地を巡る一環として富岡町を訪れたもので、私は通訳のお手伝いをさせていただきました。

富岡町は、震災前人口が 16,000 人でしたが、2011 年 3 月 11 日の地震、津波そして原発災害により現在住んでおられる方は 2,200 人ほどになりました。そんな状況の中、住民の皆様の復興へのエネルギーによって大きく変わりつつある、とても素晴らしい町です。1,500 本の桜のトンネルが 2.2 キロ続く名所である「夜の森」も、今年は本格的に桜祭りが開催されました。2019 年に園児 5、6 人で始まった「にこにこ子ども園」も今は 70 人ほどになりました。未来を担う世代が増えています。



海に面した葡萄畑

augmente.

Le vignoble est situé sur une colline d'où l'on jouit d'une vue panoramique sur l'océan Pacifique. C'était une belle journée et les filles s'amusaient, en oubliant leur nervosité à l'approche de la compétition principale à Tokyo.

En fait, j'avais visité l'endroit avec les médias en 2016. À l'époque, j'avais été impressionnée par la guide conteuse, Madame Aoki qui était directrice d'un lycée de Tomioka. Elle a dit << Certains jeunes vont cultiver la vigne ici et se vantent de vouloir porter un toast aux Jeux Olympiques de Tokyo2020 avec le vin et leur carpaccio de poisson "Jobanmono". Ils parlent avec un tel panache. C'est incroyable !>> À l'époque, il n'y avait rien d'autre qu'un terrain en friche devant moi. Je me demandais si cela arriverait un jour.



数年後、白ワインが楽しめる葡萄畑

Une nouvelle initiative dans une région sinistrée n'est pas une tâche ordinaire. L'initiative viticole a démarré en 2016 avec seulement une dizaine de personnes, qui étaient des volontaires parmi les habitants de la ville qui avaient été évacués vers d'autres parties de la préfecture de Fukushima à l'époque. Il y a maintenant plus de 40 membres. En 2019, 60 bouteilles de vin prototype ont été produites dans une cave de la préfecture de Yamanashi. En 2020, un nouveau vignoble de 0.2 ha a été ouvert près de la gare de Tomioka et 400 plants de raisin ont été plantés. Les vignobles situés sur la colline exposée à la brise marine conviennent au vin blanc, et leurs objectifs sont de produire et de commercialiser du vin Chardonnay dans quelques années.

Produire du vin à Tomioka est une nouvelle tentative pour redonner vie à une ville qui était temporairement vide en raison de l'évacuation nucléaire. Cela contribuera à revitaliser l'interaction humaine et à accroître la population. C'est aussi un cadeau pour la prochaine génération" explique-t-il avec des yeux pétillants.

Les demoiselles à l'esprit social (elles ont aussi visité la centrale nucléaire de Daiichi cette fois-ci) ont écouté attentivement ce qui se disait. Et elles applaudissaient avec leurs beaux sourires. Je voudrais soutenir ce plan de tout cœur.

J'espère que dans quelques années, lorsque vous verrez le vin de Tomioka dans les magasins et ailleurs, vous vous souviendrez de cette histoire de Tomioka machi.

“À la merveilleuse ville de Tomioka et aux yeux de ces belles demoiselles !”

Michiyo Kainuma

ぶどう園は太平洋を一望できる高台にあります。その日はとても天気の良い日で、ミスたちも東京での本戦への緊張を忘れて楽しんでおられました。

実は、私は2016年ごろ、海外メディアの方々とそのを訪れたことがありました。その時印象的だったのは、語り部ガイドの青木さん（もとは富岡高校の校長先生）が、「何人かの若者たちが、ここでぶどう栽培をして、2020東京オリンピックには、そのワインと、常磐ものの魚のカルパッチョで乾杯するんだ！なんて威勢のいい事を言ってるんですよ。すごいでしょ！」と説明してくれたことでした。その時は目の前には荒れた土地があるだけの所でした。私は、「実現するのかしら」と思いました。

被災地での新しい取り組みは並大抵のことではありません。ぶどう栽培の活動は、当時、県内各地に避難した町民有志が集まり、2016年にたった10名ほどで始まったものです。現在40名を超える会員がいます。2019年には、山梨県のワイナリーで、60本のワインを試作しました。2020年には富岡駅近くに0.2haの新規ぶどう園を開設し、400本の苗木を植え付けました。潮風にさらされる高台のぶどう園は白ワインに適しており、数年後にはシャルドネワインを作り、売り出すことを目指しています。



葡萄畑の建物

「富岡町でのワイン作りは、原発避難で一時だれもいなくなった町に賑わいを戻すための新しいチャレンジです。人の交流を活性化し人口を増やすことにつながります。私たちの次の世代への贈り物でもあります。」と、キラキラした目で、説明がありました。

社会的なことにも関心のあるミスたちも（彼女たちは、今回、東京電力福島第一原子力発電所も訪問しました）真剣に話に耳を傾けていました。そして、その美しい笑顔で応援を送っていました。私も心から応援したいと思います。

皆さん、数年後にお店などで「とみおかワイン」を見かけた際には、今回の話を思い出していただけると嬉しいです。

「素晴らしい富岡町と美しいミスたちの瞳に乾杯！」

（フランス語会話教室受講生 貝沼実千代）

## 小笠原諸島周遊の船旅 2023年11月

銅鑼と共に船は岸を離れはじめた。思いの外速い。船旅はいい。荷物を船室に運び入れてしまえば、後は船が動いてくれる。デッキで小旗を振っていた人たちが船室へ引き上げた。暮れてゆく東京湾の灯りを眺めながら、夕食のため席に着く。

小笠原諸島は東京から1,000キロメートル。船でしか行けない世界自然遺産(2011年登録)だ。

＜鳥島＞ 明ければ旅はもう二日目。海は深い藍色。たくさんのカツオドリが、船にまわりつくように飛び交う。時にねらいを定め、翼を体にぴったりたたみ、鑪の穂先を海面に突き刺すように降下する。鳥島が既に間近に見える。鳥島はアホウドリのコロニーとしてよく知られている。



上陸禁止の鳥島  
(はるかにアホウドリの群れ)

この大きな白い鳥(翼を広げると2~3.5メートルにもなるという)には、悲しい物語がある。羽毛を利用するため人間の手で捕りつくされ、その数500万羽といわれ、絶滅したとされていた。(1949年 絶滅宣言)しかし、1951(昭和26)年、島の気候観測所所長により再発見されてから保護と繁殖のための調査がはじまった。コロニー保全のためのススキの島内移植、土砂崩れ防止の工事。そして1992(平成4)年、デコイ作戦が始まる。これが見事に功を奏し、1999(平成11)年、39羽のひなと、全部で1070羽(推定)のアオウドリを確認するまでになった。

こうした説明をガイドから聞きながら、島に目をやれば、崖にはさまれた急斜面の草地に点々と白いモノが。双眼鏡でアホウドリと認めることができた。

それにしても、こも「アホウドリ」というひどい名前は何かならないか。生物学者の長谷川博氏は、こう提案する。「この鳥が地球上に復活するとき…“オキノタユウ”(沖の大夫)と呼ぼう…」と。これは山口県で昔呼んでいた地方名で「沖合の海にすむ立派な鳥」という意味だそう。全く同感である。

長谷川氏はこうも警鐘を鳴らす。「アホウドリが順調に殖えることを妨害する原因のひとつが海の汚染と漁業による事故死」であると。死んだアホウドリの胃の中にプラスチックがたまっていたり、延縄のつり針をえさと間違えて飲み込んだりの事故が増えているという。絶滅のおそれのある種を譲り、人の生業をも続けるためにはどうすればいいか、「難しい問題ではあるが、取り組まねばならない」と氏は説く。

またこの島は、土佐の漁師・中浜万次郎(ジョン万次郎)等が漂着した島としても知られる。

1841(天保12)年1月5日、船頭筆之丞(38才)、重助(25

才)、五右衛門(16才)、寅右衛門(26才)、万次郎(14才)の5人が、土佐宇佐浦を出漁し、足摺岬沖で遭難。漂流すること10日間後鳥島に漂着。断崖絶壁、水も食用になる草木も無いこの島で、実に生き延びること143日間。航海中のアメリカの捕鯨船「ジョン・ハウランド号」に救助されたその後の波乱万丈の冒険譚が、この島から始まった。因みに万次郎、筆之丞、五右衛門は十年後に帰還を果たした。(重助は怪我の傷がもとで死亡、寅右衛門はハワイに自ら残留)万次郎は幕末・明治の動乱期を生き抜き、1898(明治31)年、71才にて死去。命日の11月12日には、都立雑司谷霊園の墓前で、万次郎忌が施行されるとのこと。

＜父島＞ 好天続きの三日目、まさかの事態！父島が見えてきた頃から、船内はザワつきはじめた。上陸できる唯一の島を、私たちは楽しみにしていた。「風が強いのでしばらく様子見する」の船内放送。もともと22,000トンのこの客船は、父島二見港に接岸できず、島からの通船(小船)のピストン輸送で乗客を送迎する予定だった。13メートルの風は大型船には何ら影響はないが、通船には波が高く船に近寄れないとのこと。ついに「上陸断念」の船長判断。二見港を目前にして、あきらめる外なかった。それでも船は名残り惜し気に、島を二巡りした。

＜硫黄島＞ 四日目。今日もカツオドリは、船の水先案内のように、船先を群れ飛んでいる、天気晴朗。藍の海。デッキチェアに寝そべって空を眺めていると、雲と一緒に流れているようだ。半袖の夏服に潮風が心地良い。硫黄島に近づいたことを知らせるアナウンス。活発な噴火活動のため、船は島から5マイルの海上をゆっくり航行。台状のなだらかな地形の島には滑走路が2本あり、現在は自衛隊の基地となっている。先の大戦の激戦地であり、島には戦没者の碑、平和記念館などがあるそうだが、現在上陸禁止。



日本将兵2万余人が戦死  
今も遺骨が眠る硫黄島遠景

船のデッキから島に向かい黙とう。ポオーツと汽笛がなった。皆で花や清酒をささげた。「うさぎおいしかのやま…」と低くうたう声がかすかに聞こえた。



船上での慰霊祭

中脇ゆき子(会員)

参考資料 ひょうそんまりやく  
漂異紀畧(ジョン万次郎述 河田小龍記)  
ジョン万次郎の羅針盤(中濱武彦著)  
中浜万次郎(古谷多紀子著)  
アホウドリが復活する日(国松俊英著)